

---

# 着鎧甲冑ヒルフェマン

オリーブドラブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

着鎧甲冑ヒルフェマン

### 【Zコード】

Z4865Z

### 【作者名】

オリーブドラブ

### 【あらすじ】

高校受験を来年に控えた中学三年生・一煉寺龍太は、近所迷惑なお隣りさんに苦情を言うべく突撃を敢行する。そこで見たものは、町で噂のスーパーヒロインに変身していた すっぽんぽんの女の子！？ 変態のレッテルを貼られてしまつた龍太は、果たして名譽を挽回できるのか！？ そして、彼女が変身するヒロインの姿は一体！？ ついでに、彼女のスリーサイズは一体……あ、石とか投げないで。

## 事の始まり

「松霧町商店街で火災発生！『救済の先駆者』出動じゃ！」

湯煙に包まれた空間の中で、老人の叫び声が響き渡る。しかし、そこに声の主はいない。要するに、何らかの通信機越しに発せられた声なのだ。

その発信源を取り付けたブレスレットを右腕に嵌めた、一人の少女。

彼女は老人の声を聞き取ると、凜とした瞳を鋭く細め、浸かつていた湯舟から身を乗り出す。一糸纏わぬその姿は、さながら人間に生まれ変わったばかりの天女のようだ。なめらかな曲線を描くその身体は、ある種の神秘ささえ感じさせる。

だが、その目付きにだけは「天女」と呼べるような優雅な印象はない。あるのは、「いざ死地に赴かん」といわんばかりの決意の色だ。

「わかつたわ、おじいちゃん……着鎧甲冑ツ！」

例の老人と機械を通じて言葉を交わすと、彼女は呪文を唱えるかのようにブレスレットに叫び、それを装着した右腕を勢いよく突き上げる。さながら、世に言う「変身ポーズ」のように。

刹那、彼女のみずみずしい肢体は機械の腕輪から飛び出す光に絡み付かれてしまう。その輝きは少女の全身を覆うように広がって行き、やがて光はある形状に固形化していった。

彼女の美しい身体のラインを完璧なまでに維持した、緑と黒を基調としたボディースーツ。さらに、きめ細かく整った目鼻立ちが特徴

の麗しい顔を包み込む、フルフェイスマスク。その口元には、唇をあしらつたデザインが施されている。

まるで昔の特撮ヒーローのよつ、シンプルなそのスーツを一瞬にして身につけた彼女は風呂場の窓を開けると、一切の迷いを感じさせない動きでそこから飛び出していった。

夜の町を暗黒にさせまいと光る、月光や電灯の輝き。それらの他にもう一つ、今宵の景色を明るくさせる光があつた。

商店街の一角にある、小さな中華料理店。そこで発生した火事の勢いが、この日の夜を騒然たる状態に叩き込んでいたのだ。

「あそこね……！ おじいちゃん、被害に遭った人は！？」

『今のところは怪我人の類はいないみたいじゃの。 じゃが、火事が起きた店の上の階に逃げ遅れた子供があるぞ！』

「わかつたわ！」

スーツを纏つてからもしつかり装着されているブレスレットを通して、老人が状況を説明する。彼の指示に従つて動いている少女は、人間とは思えないような速度でアスファルトを駆け抜けていく。

既に現場では消防隊が駆け付けていたが、火の勢いが思いの外激しく、老人の言つていた「逃げ遅れた子供」がいる階まで辿り着けない事態に陥つていた。梯子車で十分届く距離ではあるのだが、なにぶん煙や炎が強烈で、突入はおろか、近寄ることさえ難しい。放水は既に開始しているのだが、火災が止まる気配は見られなかつた。

そこへ颯爽と駆け付けたのが、例の少女 が扮する、謎のヒロインだ。

彼女は自分の登場に驚く人々を尻目に、猛烈な火災に包まれた中華料理店に真っ向から突撃した。

真つ赤な炎に蹂躪された建物を突き進み、灼熱をものともしない。今の彼女は、まさしく勇敢なヒロインそのものといった出で立ちであつた。

「消防隊が鎮火を始めてるのに、勢いが全然止まらない……きっと、食用の油に引火してるのね」

冷静に物事を分析しつつ、身を焦がさんと暴れ回る火炎をかい潜り、彼女は階段を駆け上がつていく。

例え瓦礫が落ちてきてもパンチ一発で迎撃し、火に包まれても手刀一つで振り払い、足場が崩れても人間離れしたジャンプで危機を脱する。

そんな彼女の快進撃を阻む障害は、ありえなかつたらしい。

やがて到達した目的の階層で、例の子供を見つけた時も……彼女は無傷であるばかりか、息一つ切らしていなかつた。

そして少女は無事に子供を救出し、固唾を飲んで見守つていた人々の拍手喝采を背に、夜の闇へと姿をくらました。

全身を謎に包めた、無敵のヒロイン　　その存在は、この活躍を通して人々の間に「より」浸透していくことになる。

そんな彼女が満足げに帰宅した頃には、既に時刻は夜の十時を回つていた。クリスマスが近いこの季節に、この時間帯はかなり冷え込む。

自宅の一軒家を前にした少女は、周囲に目撃者がいないことを確認するべく、辺りを見渡す。そして誰もいないことを確かめると、素早く家に入れるようにと開けておいた窓から、速やかに帰宅する。

窓で出入りするのはよろしくないことだと知っていたが、それでも正体がばれる可能性を最小限に抑える努力を怠るわけにはいかないというのが彼女の言い分だ。

馬鹿正直に玄関から行き来していたのでは、いつ通行人に見つかって自分の素性が露呈してもおかしくない。それを思えば、多少はしたことではあっても、窓からコソコソ出入りした方がまだマシ、ということなのだ。

そういう事情から、彼女は窓から忍び込む格好で二階の自室に入していく。そしてサッと窓とカーテンを閉め、辺りをキヨロキヨロと見回す。

この場に誰もいないのは当たり前で、同居している彼女の祖父すなわちさつきまで彼女と話していた老人も、今は一階のリビングでニュースを見ている頃だ。

それなのにここまで彼女が気を張っているのは　　スーツの下が全裸だからだ。

人命救助という自身の使命を果たした以上、これ以上このスーツを纏う意味はない。無駄にスーツの力を使わない、と決めているからには、帰宅すればすぐにそれを解除するのが筋だ。少なくとも、本人はそう捉えている。

だが、今の彼女は風呂場から咄嗟にスーツを着用して飛び出してきたため、その下にはブラジャーやパンティーすらない。この摩訶不思議なスーツを使っての人命救助活動は、彼女と彼女の祖父がこの町に来た頃から続けてきたことであるが、下着も穿かずに出動したケースは今回が初めてなのだ。

いつもなら下に普通の服を着ているから、すぐさまスーツを解除できているはずなのに、今回ばかりはそれがままならない。それも

そのはず、彼女はまだ十五歳の思春期真っ盛りなのだから。

それでも、彼女は自分の決めたことを曲げたくはなかった。そんな頑固なまでの真っ直ぐさは、彼女の取り柄でもあり、欠点であるとも言える。

故に彼女はその場でステッスを解除し、自室のタオルで身体を巻いてから風呂場に戻ることに決めた。脱衣所には着替えを置いてあつたので、取りに行かなければならないのである。

しかし、その判断はこの時の彼女にとって、最大のミスを招く結果となる。同時に、この物語の起点にも繋がるのだ。

まず、ブレスレットに「着鎧解除」（ちやくがいかいじょ）と囁く。すると、それに呼応したかのように輝くスースが、光の幕と化してブレスレットの中に収縮していった。

その光が収まる頃には、彼女は風呂場にいた時と同じ、白い肌をさらけ出した美しい裸身となっていた。すぐさま頬を赤らめ、慌ててタオルを取ろうとタンスに手を伸ばす彼女。

だが、その手は目的の物を掴む瞬間に、ピタリと止まって動かなくなってしまう。

気配を、感じたからだ。

その出所の方向を、恐る恐る振り向いた彼女。その視界に、非情（？）な現実が突き刺さる。

彼女と同世代くらいの男の子が、呆然と立ち尽くしていたのだ。

……そう、彼女がスーツを收め、艶やかな肢体をさらしている、この光景を前にして。

## こんなボーイ・ミーツ・ガールは嫌だ

少年の名は、一煉寺龍太。

高校受験本番を来年に控えた、中学三年生である。そんな彼が、自宅の隣にある一軒家のリビングで正座させられているのには、それなりの事情というものがあった。

一学期がもうすぐ終わる、という時期に隣に引っ越してきた救芽井家。その家から度々発せられる激しい光が眩しい余り、隣に住む彼は冬休みに入った今でも受験勉強に集中できない、という苦境に苛まれていたのだ。

龍太や救芽井家が暮らしている、この松霧町には密集した住宅地が多い。それだけに、救芽井家の出す光を迷惑がっている住民は決して少なくはないのである。特に、隣に住んでいる上に受験が懸かっている龍太のストレスは大きいだろう。

そんな彼が、苦情を訴えるべく救芽井家に足を運ぶことは不思議なことではないのかもしれない。

救芽井家もそういつた反響は覚悟していたらしく、一家の長だという六十三歳の老人・救芽井裏吾郎丸は、何度も苦言を呈する龍太を懸命になだめていた。

彼の温和な人柄が功を奏してか、龍太も「近所のこともたまには考えてくださいよ!」と言ひ程度であり深くは追及してこなかつた。しかし、それにも限界がある。

何度文句を言つても光の勢いは止まらず、そればかりか日を追うごとに光が出る回数が増えていく現状に、血気盛んな中学生はとうとう腹に据えかねたのだ。

怒り心頭の龍太は裏吾郎丸の制止を振り切り、光の出所である部

屋 すなわち、稟吾郎丸の孫娘・救芽井樋稟の部屋に突撃したのだ。例の光を止めてほしいと、直訴するために。

そこで見てしまったのが、松霧町で噂のスーパーヒロイン だつた、全裸の少女。思春期の男には刺激的過ぎる出会い方をしてしまった龍太は、顔を真っ赤にして悲鳴を上げる樋稟に蹴り倒されてしまったのだ。しなやかな脚から繰り出す回し蹴りを顔面に喰らい、本番を控えた受験生は努力の成果（記憶）が飛びかねないほどの衝撃を受けることとなつた。

事情はともあれ、人の家に押し入つて少女の裸を見てしまったことは事実。その償いはあつて然るべきという方針に従い、龍太は今、稟吾郎丸と樋稟の前で正座を強制されている……という次第であった。

「そそ、そりやあ受験なんだから大変だつていうのはわかるし、悪いとは思うけど……だからつて手段は選ぶべきでしょ？ 変態君！」  
「ちょ、変態とはいくらなんでも失敬な！ 僕には一煉寺龍太という名前がちゃんとあつてだな！ それに、僕だつて予想外の展開だつたんだぞ！」

「で、でも見たじやない！ エッチ！ スケッチ！ ワンダーランド！」

「なんだよその夢の国！？ エッチなワンダーランドつて ちょつと行つてみたいんですけど！」

微妙に話が脱線しようとしていた。

「まあしかし、こんな形で外部の人間に知られてしまうとはのう」  
「そんな二人の平行線（？）な会話を見兼ねてか、稟吾郎丸が口を挟む。ちなみに彼はその人柄と名前の長さから、龍太に「ゴロマルさん」の愛称で呼ばれている。

「そう、それ……。救芽井が変身してたあの姿。あれって、最近町で噂になっているスーパーヒロインだよな？　まさか本物に出くわすことになるとは思わなかつたよ」

「く、くうつ……。まさかよりによつて、初対面で裸を覗くような変態君に正体を知られるなんてえ……」

勝手に付けられた不名誉なあだ名に、龍太は思わず眉毛を吊り上げた。

「だから、その呼び方勘弁してくれよ！　事故なんだつてば！」

「なにがどう事故なのよあー！　思いつ切り私の身体見てたじやないつ！　まだ十五なのに、お嫁に行けなくなつたらどう責任取るつていうのつー？」

とうとう顔を両手で覆い、泣き崩れてしまつ樋稟。女に泣かれてしまつては、龍太としては手も足もでない。

「うう……頼むよもう、堪忍してくれよ……」

助けを求める彼は、樋稟の横にいる稟吾郎丸に縋るような視線を送る。

しかし、龍太の腰程度の身長しかないほどの小柄で、サンタのようなボリュームたつぱりの白髪が特徴の老人は、無言で「お手上げ」を主張するだけだつた。

「さつき話したとは思うが、わしらは着鎧甲冑の技術漏洩を防ぐためにこの町に来たのじゃ」

「あ、ああそう！　それそれっ！　あんた達が作ったメカを兵器にしようとする奴がいて、そいつがこの町にいるんだつたつけ？」

せめてもの助け舟として、稟吾郎丸は別の話題を振る。これ幸いと話に乗つかる龍太は、彼らから素性を聞かされていた。あらゆるトラブルや火事に颶爽と駆け付け、人々を救う噂のスーパーヒロイ  
ン　その正体を見られた以上、『まかすことはできないからだ。

着鎧甲冑 ちやくがいかつちゅう

それは、科学者の家系である救芽井家が開発した、

最新銳レスキュースーツの別称である。

かつて地震や火災に苦しめられた経験を持つ樋稟の両親が、「どんな危険な場所であつても、そこで助けを求める人々に手を伸ばせる存在を生み出したい」という願いを込めて、作り出したものなのだといふ。

着用すれば超人的な身体能力を発揮し、炎も瓦礫も突破してしまう。さらに、エメラルドに輝くブレスレット型ツール「腕輪型着鎧装置（ハンドル・アルバント）」を介して、粒子化されて収納されている着鎧甲冑を瞬間的に装着することができる。

防火服の耐久力を超え、機動隊のシールドの硬度を凌ぐ。そして、あらゆる状況で迅速に装着できるこのボディースーツは、まさに人命救助という目的のために創出された存在だと言える。

そして、その第一号は「救済の先駆者（ヒルファーマン）」の名を与えられたのだった。

「はあ……じゃあやつぱり、武器とか必殺技とかないんだな」「あるわけないでしょ！」  
「速射破壊銃とか」「何に使うの！？」  
「ロケットパンチとか」「私の腕が吹っ飛ぶわよ！？」  
「おっぱいミサイルとか！」「死にたいの？」  
「サーセン」

……しかし、その技術を救助活動のみに使うことを許さない者がいた。着鎧甲冑のテクノロジーの兵器転用を狙う者が現れたのだ。その名は古我知剣（じがちけん）一。かつて樋稟の両親と共に着鎧甲冑の開発に

携わっていた青年科学者である。彼は着鎧甲冑の技術を兵器として運用すれば、紛争が絶えない世界各地に救芽井家の技術力を知らしめる」ことができると言った。

無論、着鎧甲冑の本来のコンセプトから外れたその意見は許されず、ほどなくして彼はクビになってしまった。救芽井家の利益を視野に入れての発言であつたにもかかわらず、開発計画から外されてしまった彼は「報復」を決意。

樋稟の両親を誘拐して松霧町に逃亡し、自らが開発した自律機動兵器をつての「着鎧甲冑の技術奪取」を目論んだのだ。彼自身を司令塔とした、その機動兵器の集団は「技術の解放を望む者達」と樋稟達に呼ばれている。

その上、古我知は開発計画に参加していた頃から密かに入手していた、着鎧甲冑の設計図を元手に「呪詛の伝導者」を開発していた。「着鎧甲冑」の事実上の第一号にして、初の兵器転用を実現させた「凶器」である。

彼はそれを用いて、第一号の「救済の先駆者」を破壊して樋稟と稟吾郎丸を捕らえ、「『救芽井家』の生み出した『着鎧甲冑』の痕跡」を消し去り、自らが第一人者の座に取つて代わるつもりなのだ。両親を誘拐された樋稟は稟吾郎丸と共に古我知を追い、住み慣れた研究所を離れて松霧町に身を置いた。かけがえのない家族を救い、守るべき人命を傷つけんとする「呪詛の伝導者」を処分するために、「……そのために、人命救助に勤しみつつ古我知つて人を探してゐてわけか。苦労してんなあ」  
「お、驚かないの？ ていうか、あつさりと信じるのね……」「まあ、あんなものを直に見せられたら納得するしかないだろ。それにさつきのアレで、もうビックリするのが飽きるくらいビックリしたしな」

敢えて目を逸らして、龍太はぽつりと呟く。その言葉の意味に感

づいた樋稟はさらに顔を真っ赤に染めて、抱きしめるよつに両腕で発育のいい胸を隠した。

「や、や、やつぱり！ 变態君はやつぱり变態君だったのね！」

「だーかーら！ 事故だつて言つてるだろうー。勘弁してちょーだいよ！ ポロマルさんからもなんとか言つてくれない！？」

「あいにくじやが、専門外じや」

素つ気ない返答に、龍太は頭を抱えてツーブロックの黒髪を搔きむしる。世間一般の目で見れば「中の下」と判断されるであろう彼の顔は、困惑と焦燥の色に染まりきっていた。

しかし、焦つてしているのは樋稟も同じである。

彼女の両親は着鎧甲冑を造り出した天才中の天才であるが、彼女自身もまた、十二歳で海外の大学を卒業する程の才女なのだ。

故にその才能を評価されていた彼女は昨年から両親の助手を務め、着鎧甲冑の開発計画を手伝つていた。そんな人生だったからか、彼女には同世代の友人がいない。箱入り娘であつたために、男の子など以つての外だつた。

そんな樋稟としては初めての「『同世代の男の子』との出会い」

……だつたのだが。いかんせん運が悪すぎた。

面識のない赤の他人である少年にいきなり裸を見られた彼女は、ひどく動転してしまつてすっかり彼を警戒してしまつてている。

龍太としても容姿故に女の子と絡んだ経験がほとんどないために、樋稟との出会い方やその後の展開には動搖するしかない……のだが、彼女の場合はそれを大きく凌いでいた。

「とにかく！ 口外は絶対にしないこと！ いいわね、变態君！」

「わかつてゐよ。あと、変態じやないつて！」

「いいえ、お父様は言つてたわ！ 『心を通わせずに裸を見ようとする男共はみな変態だ』つて！」

「じゃあ心を通わせるためにも俺の言い分を聞いてくれーー！」

いくら説得しても変態呼ばわりを止めない樋稟に、頭を悩ませる龍太。

その時だった。

「まつたく……ん？」

ふと、彼はリビングのカーテンに不自然な人影がゆらめいていることに気づく。

首や手足がぎこちなくうじめく、そのシルエットに龍太はえもいわれぬ不気味さを感じた。

「なんだ……？」「ロマルさんと救芽井の他に、誰かいるのか」

「なに言つてるの？　この家には私とおじいちゃんしかいな」

そこまで言いかけた彼女が龍太の見ている方向に視線を移した時。

絶世の美少女は、焦燥に顔を引き攣らせた。

それはシルエットに気づいた稟吾郎丸も同じであり、状況が飲み込めない龍太だけが首を傾げていた。

「な、なんと……！　まさか、こんなところまで挑発に来るのは…」

「くつ！」

樋稟は驚愕の言葉を漏らす稟吾郎丸を一瞥すると、眉を潜めながらカーテンを開けてシルエットの正体を暴いてしまう。

「う、うおわあっ！？」

その正体の異様な風貌に、何事かと正座から立ち上がりうとして

いた龍太は腰を抜かしてひっくり返ってしまった。

「ムンクの叫び」を思わせるような凄まじい形相を象った鉄仮面に、黒い西洋甲冑で全身を固めたような格好の、人ならざる人。すなわち、例の古我知剣一が擁する自律機動兵器「解放の先導者リベレイタ」が現れたのだ。

「『技術の解放を望む者達』……！ いくら夜中だからって……」「待つんじゃ樋稟！ 今、存在が世間に知れたら困るのは向こうも同じじゃ！ どうせ奴らは襲つては来れん！」

「このまま放つてなんかおけない！ 私達の都合で誰かを巻き込まないうちに、早く決着を付けないと！」

そそくさと窓の向こうから立ち去つていいく「解放の先導者」。樋稟はその機械人形を追つて家を飛び出そうとするが、稟吾郎丸は必死に制止する。

というのも、あの逃げた機械人形を追つていけば「呪詛の伝導者」と遭遇する事態は、避けられないはずだからだ。現時点において、救芽井家は兵器としての戦闘能力を持つた「呪詛の伝導者」に対抗する術を持っていない。

生身の人間に比べてパワーはあるものの、運動性で着鎧甲冑を使う人間に劣る「解放の先導者」はともかく、戦闘用に特化した「呪詛の伝導者」に接触すれば、たちまち「救済の先駆者」はスクランプにされてしまうだろう。

しかし、それ以上に彼女は自分達が造り出したテクノロジーを巡る抗争に、他人を巻き込む事態を避けたいという気持ちが強かつた

のだ。

樋稟は稟吾郎丸の小さな体を振り払い、ショートボブの茶髪を揺らしながら、自宅を飛び出していく。

そして、感覚的に関しても物理的に関しても置いてけぼりを喰らつてしまつた龍太は

「た、頼む龍太君！ 樋稟を……あの娘を助けてやつてくれい！」  
「あー……やつぱそいつ展開？」

わけがわからないまま、樋稟を追いつきに言われてしまつて  
いた。

「……ああもう、なんなんだよ今夜は！ こうなつたらあの娘を助  
けて、変態のレッテルだけでも剥がしてやるつ！」「

他所の難しい話は、知識を詰め込もうと必死な受験生にはよくわ  
からない。

それでも、変態扱いされたまま別れることは、仲が悪いまま終わ  
らせることを嫌う彼の性分に反することだつた。

龍太は、カーテンが開けられた窓から樋稟が走つて行つた道を確  
認すると、愛用の赤いダウンジャケットと黒のフインガーレスグロ  
ーブを着用する。

「受験生に面倒事をあてがわないで欲しいね、まったくっ！」  
そして両手で頬をパン！ と叩いて気合いを入れ、一人の少女を  
追つて救芽井家を出発していく。

彼の冬休みの稀少な一時が今、始まろうとしていた。

## ひとりが、戦闘

さてさて……勢いよく飛び出して来ちゃこまししたけども。

目の前で起きてる状況に、俺はどうコメンツすりゃいいんだ！？

あの意味不明な機械人形（？）を追つて家を飛び出した救芽井の後をつけて、俺は住宅街のはずれにある公園まで来ていた。それなりに雪が降り積もってくれているおかげで、足跡を辿るだけで追いつけたのはラッキーだったんだが

「たあああッ！」

眼前で繰り広げられてる乱闘が、とにかく普通じゃなかつた。

不気味な格好をした等身大のロボット集団を相手に、パンチやキックをお見舞いしている救芽井 が変身しているであろう、この町で噂のスーパーヒロイン。

「救済の先駆者」なんて名前を持った彼女の立ち回りは、まさしく悪の組織に立ち向かう特撮ヒーローのようだつた。事情を知らなければ、口ケにすら見えるだらつ。

「やあああッ！」

……いや、そう例えるには気迫がマジ過ぎるか。公園を舞台に喧嘩だなんて、子供の教育によろしくないしなあ。

救芽井に殴り飛ばされた機械人形は激しく宙を舞い、滑り台やブランコにたたき付けられる。当然、それらの遊具はもれなく木つ端みじんに……おいおい、世間に知られちゃまずいとか言う割りには派手に暴れてんなあ。

ま、銃器の類をぶつ放されてないだけマシか。「機動兵器」にしちゃあ、武器とか使つてる気配はないし……。

「世間に知られたら困るのは向こうも同じ」「確かゴロマルさんはそう言つていたはずだ。

……そうか。なら、目撃者である俺が存在をアピールすれば、少なくとも乱闘を中断させることはできるかもしない。「向こうも同じ」というからには、救芽井側も機械人形側も目撃者がいるとわかれれば、引き上げざるを得ないんじゃないか？

「兵器転用だか情報漏洩だか知らないが！ 人が暮らしてゐる町ですき放題やつてんじや 」

そう思つた俺は声を張り上げようとして 吹つ飛ばされてきた機械人形の体を顔面にぶつけられた。

「ブフアッ！？」

そのまま後ろにひっくり返つた俺は、倒れたまま動かない機械人形の下敷きにされてしまう。うげ、重たい……鉄なんだから当たり前か。

俺に乗つかかる奴は体の端々に火花が飛び散つており、現在進行形で救芽井にボコられてる他の奴らと違つて、動き出す気配がない。どうやら機能停止してゐみたいだな。

救芽井もロボット集団も俺の存在には気づいていないらしく、一般人の危機ほつたらかしのままで戦闘に興じてゐる。ロボット共はともかく、救芽井は人命救助が仕事なんだから助けてくれよ！？ トホホ、まさかここまで嫌われていようとは……。

いや、気づいてないだけってのは分かつてるけどね？ 初対面が初対面だから傷つくんだよ……。

そんな俺の悲哀をガン無視するかの『とく、救芽井はますます積極的にロボット集団に攻め入つていた。殴られ、蹴られ、投げ飛ばされていくロボット達は、為す術もなくスクラップにされていく。下敷きにされてるせいで、詳しい戦況はなかなか見えづらいのだが。……まあ、なんだか優勢みたいじゃないか。まだ例の「呪詛の伝導者」つてのは出てこないみたいだけど、これならひょっとして楽勝なんじゃないか？』

他人事ではあるけれど、やつぱりお隣りさんが勝つてくれる方が嬉しい。それに、この一件が解決すれば、救芽井が出す変身の発光に悩まされることもなくなるかも知れないんだから。

うーん、それはそれで救芽井の人と話す切つ掛けがなくなるわけだから、寂しくなりそうな気はしないでもない。おつかない救芽井はともかく、ゴロマルさんは割といい人だからなあ。あの人、「受験頑張るのじゃぞ」ってお菓子とかいろいろ差し入れてくれるし。

「……ん？」

すると、今まで引つ切り無しに響き続けていた乱闘の騒音がピタッと止んでしまった。救芽井が勝ったのか？

やつとの思いで、俺は自分を下敷きにしていた機械人形を押しのけ、目の前の状況を確認する。

「解放の先導者」とかいうロボットは全滅し、その屍の上には救芽井が立っている。そして、彼女の視線の先にはピッチリと黒いスーツを着こなした男の人人が立っていた。肩まで掛かった焦げ茶色の髪が、なんだかホストみたいだ。

「おやおや、本当に頑張り屋なんだね。樋口ちゃん」

「剣一さん……」

公園を舞台に、対峙する美男美女。剣一さん……ってことは、あのイケメンお兄さんが例の「古我知剣一」ってことなのか。てことは一連の事件の黒幕……ってことになるんだろうけど、あんまりそういう風には見えないなあ。身長が百六十五センチしかない俺が言うのもなんだけど、見るからになよなよしてる感じだし。

だけど、救芽井の面持ちはかなり深刻つて感じがして。万引きがバレた悪戯っ子みたいだぞ。

「あーあー、僕のおもちゃを好き勝手に壊してくれちゃって。『解放の先導者』だつてタダじやないんだから、もつゞレソフトに扱つてくれないかなあ」

「ふざけないでくださいー。いいで食つたが百年田、お父様とお母様を返して頂きます。それに、『解放の先導者』のプラントも必ず摘発します」

「おお、怖い怖い……。そんなこと言わると、抵抗したくなっちゃつなー。僕！」

古我知さんの田付きが、降り積もる雪にもからぬ冷たさを見せる。おお……悪い顔してんなあ。

よく見てみると、あの人の右腕には、救芽井が嵌めてるブレスレットと同じようなものがある。色は黒いけど、形状は全く同じだ。

「腕輪型着鎧装置」……だつけ？

古我知さんは右腕をゆつくと自分の胸の前に上げ、不敵に笑う。

「着鎧、甲冑」

そして、何かを呟いたかと思えば あつという間に、その姿が光を帯びて変わってしまった。

真っ黒のメカメカしい鎧で全身が覆われていて、見るからに「強そう」なイメージを与えるフォルム。『救済の先駆者』もそうだけど、こっちもなかなか特撮ヒーローみたいでカッコいいデザインではないか。脣があるマスクなどはどっちも同じみたいだけど。なんか腰に剣とかピストルとか差さってるし、確かに戦闘用つて感じの出で立ちだよな……これが例の「呪詛の伝導者」って奴なのか？

いやあ、まさか本物の変身ヒーローを間近で見られるなんて思いもしませんでしたよ。悪者なのが惜しまれるが。

つーか、本当はこんな呑気なこと言つていい状況じゃないんだろうな。俺一人が「蚊帳の外」なだけで。

「剣一さん。申し訳ありませんが、あなたの目論みはおしまいです

……！」

「試作品のレスキュースーツで、戦闘用のパワードスーツに挑むか。樋口ちゃん、君のギャグセンスならM・1が狙えるよ

冷たい風が吹き渡り、睨み合つ両者。

片田舎の小さな町を舞台に、一人の決闘が始まろうとしていた……！

えーと、俺つて何しにここに来てたんだっけ？

公園を舞台にした、無駄に壮大な決闘。

最初に仕掛けたのは、救芽井の方だった。

「はあああッ！」

地を蹴つて駆け出す彼女は矢のように襲い掛かる けど。

「おお、よく見える見える」

感心するような声を上げる古我知さんに、あっさりと投げ飛ばされてしまった。

「あううう！？」

巴投げを喰らつてブランコにぶつけられる「救済の先駆者」。ああ、子供達の憩いの場が見るも無残な姿にい……。

それにしても、「見える見える」って……古我知さんは何が見えたっていうんだ？ 救芽井のぱんつか？

確かにそれは、この季節にミニスカを履いていた彼女の自己責任だとは思うが、覗きなんて分別のないことをいい大人がするなんて

「君の対『解放の先導者』用格闘術のデータは全て、この『呪詛の伝導者』にインプットされてるからね。君の動きは僅かなモーションだけでも完璧に見切れるのさ」

あ、なんか違うっぽい。思つたより真面目なものを見ていたようで、なんだか申し訳ないなあ。

考えてみれば、そもそも今の救芽井は変身してるんだから、どんなに頑張つたアングルでもぱんつは見えないはずだ。うーん、知らない間に煩惱が渦巻いていたようだ。

そりやつて俺が一人で悶々としてる間に、救芽井が起き上がりつた。ブランコの鉄柱の部分にぶつかっていたから、さぞかし痛かっただろうに……。

「やりますね。でも、まだまだこれからです！」

「あら。なんだか平氣でいらっしゃるみたい。着鎧甲冑つてずいぶん頑丈なんだな……。

「もう諦めたら？ 大人しく『救濟の先駆者』を捨ててくれれば、怪我させずに済むんだけどなあ」

「ふざけないでッ！ お父様達の願いを そんなことのためにッ！」

「やれやれ……強情つ張りなのは親子そつくりだね」

古我知さんはため息混じりに、腰からピストルを引き抜いた。おいおい、こんなところで発砲する気かよ！？

「させないッ！」

ピストルを使わせまいと、救芽井は再び「呪詛の伝導者」に襲い掛かる。心なしか、「銃声を上げられては困る」と慌てているようにも見えた。

「だよね……僕も使いたくないなッ！」

すると、古我知さんの方も 駆け出したッ！？

「 ッ！？」

銃を撃つのかと思いきや、そのまま突進してきた相手に動搖したのか、救芽井はピタッと動きを止めてしまう。その一瞬の隙を突いて、古我知さんは持っていたピストルの銃身で彼女を殴りつけた。うわあ痛い！

「あううッ！」

救芽井は思わずカウンターを喰らい、地べたにたたき付けられてしまつ。ちゅちゅ、これってかなりマズイ状況なんじやないか！？

「ようやく大人しくなつてくれたね。さ、お父様とお母様のところに行こうか」

倒れた彼女の頭を踏み付けている古我知さんが、挑発的に笑っているのがわかる。顔こそ見えないが、声が物凄く得意げになつていたからだ。「どや顔」ならぬ「どや声」か。

「くッ……！ お父様達に怪我はさせでいいでしょうね…？」

「もちろん。それに、記憶も消去していないねえ。なにせ、まだ着鎧甲冑の全データを教えてもらつてないから」

「私達は、あなたなんかに負けない……！ 着鎧甲冑のテクノロジーを、兵器になんて使わせないッ！」

「わかつてないねえ、樋口ちゃんは。この力を売り出せば、儲かるなんでものじやない。世界の歴史に名を残すことだつて出来るかもしないんだよ？ 世界中の機動隊やレスキュー隊に採用してもらって、配備してもらうだなんて味気ないとは思わないのかい？」

古我知さんはグリグリと救芽井の頭を踏みにじりながら、なにやら難しいことを詰問している。おお……まるで意味がわからんぞ。

「つづり 名を残す、なんて夢想家もいいところです！ 兵器の歴史に残る名前なんて、私はイヤッ！ お父様も、お母様も、おじいちゃんも、人を救うためにコレを造つたんだからッ！」

悲痛な叫び声を上げる救芽井。く、なんだか放つておけない事態になつてきてない？ 僕の良心という名の緊急警報が作動中なんですけど……。

「家族思いだねえ……感動しちやつたよ、僕。じゃあ、せめて家族全員の記憶を均等に消してあげるよ。君だけがかすかに覚えていて、周りが君を忘れてる、なんて嫌だろ？？」

「イ、イヤアアアッ！ そんなの、そんなのダメエエッ……！」

記憶を消す、という脅し文句が効いたのか、救芽井はかなり怯えている様子だった。「家族全員」てのが痛いんだろうな……きっと。

それにも「記憶を消す」……ねえ。こんな状況じゃなきゃ、

「冗談だと笑い飛ばせるんだけど……」

「大丈夫大丈夫。全てが終わつた頃には、僕は世界的な兵器開発者として歴史に名を残し、君達一家は「盗作」を企てた連中として刑務所の牢屋行きさ」

諭すような口調で話す古我知さんは、戦意を喪失したのかグッタリしている救芽井の頭を掴み上げ、彼女の顔を覗き込む。

「じゃあ、行こうか。僕の成功のために」

そして、その一言と共に彼は救芽井を抱えてその場から立ち去

「あー、ちょっとだけ」と

「うつてといひで、やつてしまつましたよ。俺

明らかに場違いな空氣で、俺は道を尋ねるかのよつたつりで古我知さんに話しかけていた。向こうは一人とも俺を前にして固まっている。

たつた今、ゴロマルさんを言い付けを思い出した俺も俺だけさ……そんなにビックリしなくたつていいじゃないか。だつてほら、ちょっと出遅れたらあのままゲームオーバーになつてたよつた気がするし。

「……え？ 変態……君？」

「だあーくあーるあ！ 僕は変態じゃないんだって！ いい加減勘弁してもらえないかね！」

あーもう、開口一番に変態呼ばわりとは血も涙もないな！ 全く、ちょっととかわいせうだつたから、助けてやうつて思つたらこれなんだから！

……つて、今はそ「じやないつ！

「それからあんた！ 古我知さんだつけ？ さつきから黙つて聞いてりやあ、勝手なことばかり口走りやがつて！ 手柄の横取りなんてお兄さん許しませんよ！ 多分俺の方が年下だけども…」

ビシイツ！ と「呪詛の伝導者」の厳ついボディを指差し、俺は無謀にも啖呵を切る。マスクを付けてるせいで表情は見えないけど、多分両方とも「お前は何を言つてるんだ」みたいな顔してるんだろうなあ……。

しううがないでしょ！？ カツコイイ登場の仕方なんて「咄嗟」には考えつかないんだから！

「……君は、樋稟ちゃんの知り合いかい？」

ドスの効いた低い声で、古我知さんが質問してくる。や、やべえ、超こええ！

「お、あうとも！ 早くその娘を放せ！ じやなきや……」

「じやなきや？」

「ひや、110番するぞー？」「

「ひぎやー！ カツ「悪ツ！？」

「」まで威勢よく踏み込んでおきながら、肝心なところでお巡りさん召喚かよ！？ 我ながら最低だ！ 僕のバカ俺のバカ！ 早く「」の震えた手にあるケータイしまえつ！

「……ふーん。なるほど。樋稟ちゃん、運が良かつたね」

ちくしょー、俺のバカ！ アホ！ チキン野郎！ こんな脅しで

悪の親玉が言つ」と聞くわけ あれ?

「あやつー」

「警察呼ばれちや敵わないからね。焦らず次の機会を待つよ」

「えつ? ……え?」

古我知さんは救芽井を俺の足元に投げ捨てる

……帰っちゃった。

## 遂に俺もヒーローテレビー（笑）

「警察を呼ばれたら困る…？」

公園での乱闘の後、救芽井家に帰ってきた俺は意外な事実を知らされた。

救芽井家と「技術の解放を望む者達」の抗争に、警察の介入はタブーなのだそうだ。

救芽井の方はともかく、立派な兵器を抱えた「技術の解放を望む者達」が「警察呼ばれたら困る」って……悪の組織としてそれってどうなのよ。

今度はちゃんと椅子に座らせてもらい、俺は元の姿に戻った救芽井と「ロマルさん」の話に応じる。

「剣一さんは『呪詛の伝導者』を最新鋭兵器として、世界の軍需企業に売り出したいだけなのよ。だから、その前に警察にマークされて身動きが取れなくなる事態を避けようとしてるの」

「だから俺が通報しようとしたら、あっさり逃げちまったのか……じゃあさ、なんでこっちから警察に相談しないんだ？ 人質取られてるからなのか？」

デリカシーのない質問かも知れないが、正直気になつて仕方がない。この一件が片付かないのは、おちおち受験勉強もしていられないだろ？

「それは違うぞい。剣一は着鎧甲冑の「データ」を元に『呪詛の伝導者』を造つたが、そのデータ自体も完全なものではないんじゃ。奴はより完璧な兵器を作るために、息子夫婦をさらつた……じゃから、警察を呼ぼうが呼ぶまいが、奴が息子達から「データ」を聞き出すまでは余計な真似は出来ないんじゃよ」

「だつたら……。」

「……でも、私達も警察には頼れない。もし警察この件が知れたら、どちらも不利になってしまつのよ。やるせない顔をして、救芽井は俯いてしまつ。やつしたいのはやまやまだけど、つて顔してゐるなあ。」

「どうこうついた?」

「強引な手段だつたとは言へ、私達の造つたスースが兵器に利用されようとしているのは事実よ。警察に助けを求めたら、『解放を望む者達』は簡単に解体できるけど、私達のしておいたことまで危険視されるかも知れないのよ。」

「そりなればマスクにも知れて原因を追及されかねんし、結果としてレスキュー・スースとしての採用が認められなくなる可能性があるのぢや。兵器に使われるような危ない技術なんぞ使えるか、とな……なんとも、せちがらい事情があつたもんだ。それで、警察は当てに出来ないつてことになるのか。」

「でも……それぢやあこれからどうするんだ? そつきの戦いを見る限りだと、普通にやつて勝てる相手だとは思えないんだけど。それに、戦える人が女の子だけつてのもなあ。」

「それなんぢやが 話があるんぢや。龍太君

「……え?」

薄暗く、冷たい空間をスポットライトが照らす。その光の中に、俺は連れ込まれていた。

「腕輪型着鎧装置」を付けて。

「なんだか、ますますやつこことなつてゐるなあ……」

『ぶつぶつ言わない！早く着鎧しなさい！』

ブレスレットに取り付けられている通信機から、救芽井の叱責が響いて来る。うう、耳が痛い……。

それから、どうやら「救済の先駆者」に変身する」とは「着鎧」つて言つひじいな。

「ローマルさんの頼みと言つから何かと思えば、いつの間にか救芽井家の地下室まで連行されてしまつていた。なんで一軒家にこんなもんがあるんだよ……まさか造つたのか？

『ちなみに、その秘密特訓部屋はわしが造つたのじや。どうじや、イカしておるう？』

やつぱりか。でも特訓部屋にしちゃ何もなくて、なんだか寂れるぞ……よっぽど使う機会がなかつたんだろうな。

それから、この場に一人の姿はない。リビングにあるコンピュータから、俺の状況をモニターしてるのでそうだ。

『よいか？これから君には歯獲した「解放の先導者」と一対一で戦つてもらつ。先程話したとは思つが、これは君自身のためでもあるのだからな』

「わかつてゐよ。さつさと始めてくれつ！』

あーもう、なんでこんなことになつちやつたんだか。

……まあ、これは俺が古我知さんに声を掛けちまつたせいなんだし、致し方ないのかもな。

どうやら、公園の一件のせいで俺までもが「技術の解放を望む者達」のターゲットに入れられちまつたらしい。

向こうは死人や行方不明者を出して、警察沙汰になるのは防ぎたいのだから、別に捕まつても命は取られない とのことだが、代わりに自分達と関わつた記憶の一切を消してしまつのだといつ。

しかも、その余波でそれ以前の記憶まで持つていかれる危険性ま

であるとか。正直、それは俺にとつての死活問題になりかねん！

この数ヶ月、なけなしの脳みそをフル回転させて励んだ受験勉強。その努力の結晶を、わけのわからんサイエンス集団に搔つ攫われるなんて御免だ！

ということで、俺はいざ「技術の解放を望む者達」に狙われても自分の身を守れるようと、救芽井も学んだという「対『解放の先導者』用格闘術」の訓練を受ける羽目になつたわけだ。今回は、そのために「解放の先導者」の強さをまず知つておくことが目的らしいのだが。

しかし、「格闘術」かあ……。残念ながら、俺には本格的に格闘技を学んだ経験がない。せいぜい、少林寺拳法を嗜んでる兄貴から「申し訳程度」の護身術を教わつてるくらいだ。

ケンカだつてろくにしたことがないんだぞ。こんな俺に、なにをやれつてんだかな……。

『何をボサツとしてるの、変態君！　「解放の先導者」が来るわよ！』

自分の無力さに嘆息してゐる暇もなく、向かいの扉からおつかない顔をした機械人形が、フラフラと這い出して来る。うげえ、人間じやない分余計に氣味が悪いなあ。

「やるしかないな……よーし、着鎧甲冑ッ！」

俺は「腕輪型着鎧装置」にあるマイクに、勢いよく音声を入力する。

すると、目の前が真っ白な光に覆われ　気がつけば、俺は「救済の先駆者」の姿に成り果てていた。昨日まで、この姿をテレビや新聞で眺めてるだけだったのが嘘みたいだな……。できるだけ全身を見渡してみると、スーツが俺の体に合つた形になつてゐるのがわかる。

これが現実であると確認するために、俺は機械の鎧に包まれた両手で、頬を叩いてみる。微妙に衝撃は感じるけど……全然痛くない。改めて着鎧甲冑の凄さに感心していると、『実戦でそんなことしてる暇なんてないわよー。』と救芽井に怒られてしまった。ああそうだった、俺つて今戦わなくちゃいけないんだっけ。

実戦を演出するためなのか、「解放の先導者」との戦いは「コングもなし」に始まった。姿を見せるなり、奴はいきなり襲い掛かって来たのだ。

「解放の先導者」は両手を広げて、覆いかぶさるように迫つて来る。それに対して、俺は両腕で頭を守るようにしながら、右足の膝を上げた。少林寺拳法で言つとこりの、「待ち蹴」の体勢だ。

相手が仕掛ける瞬間、一いちから蹴りを決めて距離を取る。言うなれば、「カウンター」の技だ。

少林寺拳法には「守主攻従」という、守りを第一にした原則つてものがある。自分からガンガン仕掛けるやり方は、俺には合わないつてことだ。

「はッ！」

早すぎればかわされ、遅すぎれば攻撃を喰らう。そんな微妙なタイミングで、俺は短い気合の声と共に、上げた膝を伸ばして蹴りを放つた。

金属同士が激しく接触する音が鳴り響き、奴の突進が止まる。や、やつた！ 決まつたぞ！

『……ほほお』

通信機越しに、『ロマルさんの感嘆の声が聞こえて来る。ビヤッ

！ 兄貴仕込みの蹴りの味はつ！

……などと喜ぶ暇もなく、再び奴は俺に向かつて來た。おいおい、

一応みぞおちは狙つたはずだぞ！？ もう少し痛みに悶えてもいいんじやないか！？

「 くそッ、なら！」

でも、今は焦つてる場合じやない。

俺は一、三歩距離を取り、今度は左足の膝を思い切り上げる。さらには、その向きを右斜めに曲げた。

空手にもある、人間の顎にある急所「三日月」みかづきを狙い撃ちする「三日月蹴り」だ。顎の横を薙ぎ払うように蹴る技なのだが、これは急所を狙うというだけあって危険なものもある。

だけど、相手は人間じやない。人間みたいに動くだけの、機動兵器に過ぎない！

「 だああッ！」

スパツと振り抜かれた俺の蹴りが、奴の顎を掠めていく。そして機械人形の鉄の首は、関節技でも決められたかのように、グキッとひん曲がってしまった。

うーむ、後味は悪いが……これならダウンは必至だらう。初陣は白星で確定だ！

と、思つていたのに。

「 う、嘘ツ！？」

奴は何事もなかつたかのように、ガシャリと首を元に戻してしまつた。そして、指先から鋭利な爪を出したり、胸から機銃のようなものをガチヨンと出現させたりして来た！

ちょっと待て、お前それでも人間か！？

あ。

人間じゃ、ありませんでしたね……。

ひゃー。

結局、あの後は散々だった。

爪で引っ搔かれるわ、機銃で蜂の巣にされるわ。しまいには氣を失つてしまい、気がつけばリビングのソファーに寝そべっていたのだ。

当然、救芽井さんはお怒り。両親が手塩に掛けて作り上げた「救済の先駆者」を傷物にされたんだから、当たり前か……。

「全く！ いくら初めてだつたからつて、たつた一体の『解放の先導者』に手も足も出ないなんて！ それでも男！？」

「男だからって皆が皆強いわけでもないだろ……。だいたい、なんでわざわざ俺を鍛えなくちゃ いけないんだよ。お前が古我知さんに勝てる作戦を立てれば済む話じゃないのか？」

酷い言い草の救芽井に対し、俺はちょっとばかり拗ねた態度になる。

考えてみれば、俺が狙われているからといって、必ずしも俺自身が着鎧して戦わなくちゃ いけないことにはならないはず。むしろ、俺を巻き込んだ形になる救芽井側が責任を持つて、護衛するのが筋じゃないのか？ 情けないかも知れないが、こっちの着鎧甲冑が救芽井の持つ「救済の先駆者」しかない以上、俺が生身の状態で「解放の先導者」に出くわしたって敵いつこないのは一緒なんだし。

いちいち素人をしごいて戦えるようにするくらいなら、足手まいをほつたらかして打開策を探す方が建設的な気がする。うう、自分で言つて悲しくなってきたぞ……。

俺が抗議の声を上げると、彼女はバツが悪そつに手を背けた。気のせいいか、その頬はほんのりと赤みを帯びている……ように見える。

「そ……そんなの簡単に行かないわよ！ それに、お、男の方が力が強いんだから、鍛えさえすれば効果的かも知れないじゃない！？」

しじろもどろしつつも、俺の前で腕を組み、仁王立ちする彼女。

おお、けしからん程のボインが寄せて上げられ、揺れておる……。

「（）両親の助手とかやつてた天才少女にしちゃあ、ずいぶんと曖昧な返事だなあ。結局のところ、俺をおちょくりたかっただけなんじやないか？」

「違うわよ！ そんなことのために、あなたに あなたなんかに、『救済の先駆者』を貸すと思う！？」

俺が皮肉っぽく尋ねると、今度はキッパリとした態度で否定された。その表情には、「先程の発言を許さない」という強い意思表示がなされている。

自分の本気を否定されたような……そんな顔だ。

「そんな言い方は一度としないで！ 私は、私は真面目に……！」

「真面目に？」

「も、もう、知らない！ 変態君のバカッ！」

「ぐはあ、「変態」と「バカ」の一重心理攻撃があ……。

精神を撃ち抜かれ、ショックに襲われた俺はソファーから転落する。そんな俺を一瞥した救芽井は、顔をかすかに赤らめつつ「フンッ！」と鼻を鳴らして去ってしまった。

数分の回復期間を経て、なんとか心理的ダメージから立ち直った俺は、パソコンに向かつて黙々と何かの作業をしていた「ロロマルさんを見つける。その傍らには、何かのチューイングで繋がれた「腕輪型着鎧装置」が伺える。

あのパソコンを使って、彼は事件や事故を迅速に救芽井に知らせて、出動を促したりしているらしい。今は俺が傷つけてしまった「救済の先駆者」を修理しているのだという。

「君も苦労しとるのう」

「……ビーも」

顔を合わせずキーボードを打ちながら、ゴロマルさんは呆れたような声で俺を労う。気に掛けてくれるのは嬉しいんだけど、巻き込んだのはあんた達ですかね？」

去年までの冬休みならいざ知らず、受験シーズンのタイミングで漫画みたいな世界観に連れ込みで欲しかったなあ。せめて春休みまで「技術の解放を望む者達」には大人しくしてもらいたかった……。

「はあ」

思いつ切りうなだれながら、俺は窓の外から近所の様子を伺う。そこでは、小さな子供がお父さんやお母さんに囲まれ、にこやかにクリスマスツリーの飾り付けに励んでいる姿があった。それに、お熱いカップルが住宅街を闊歩している様子も伺える。そういえば、もうじきクリスマス……なんだっけ。

「何がクリスマスじゃあい！ ちくしょおおおおお！ 俺は恋  
人作つてテートビうか、初対面のお隣りさんに」変態「呼ばわり  
だよッ！」

「……なにしとるんじゅ？」

「気がつけば、俺は恋にベットリと張り付いて啜り泣いていたらしい。ゴロマルさんの哀れむような視線が痛い……。

「桶稟にも困ったもんじゅ。君を過剰なまでに意識してしまったば  
っかりにのう」

顔を赤らめつつ、イライラした表情で床をトントンと蹴っている  
救芽井。そんな彼女の様子を、ゴロマルさんは心配そうに見つめて  
いる。

しかし、イマイチわからない。俺を意識してるってだけで、こんな面倒事の渦中に人を叩き込むのかよ？

「それって、俺が裸見ちまつたせいか？」

「じゃな」

じゃなって……そんなストレートに肯定しなくていいじゃな  
いかあ。確かに悪いのは俺だらうけど、一応は事故なんだしぃ……。

「ああたた以上、救芽井は君に望むしかなかつたんじゃうつな  
「何を？」

俺が尋ねてみると、『ロロマルさんは達者な髪を撫で回しながら、  
いたずらっぽく笑う。

「王子様じゃ」

「 は？」

朝口。

いろいろと衝撃的過ぎる夜を終え、朝口が真っ白な雪を輝かしく  
照らす頃。

俺はお隣りさんの女の子 救芽井と一緒に、町を歩くことにな  
つていた。

タベに『ロロマルさんと言われたことが、全ての始まりだった。昨  
晩の悪夢のようなやり取りが、つこわづかのひととひとと出で  
れる……。

「樋木は息子夫婦の夢のために、正義の味方となつてこの町を守つ  
ておるが……あの娘自身としては、本当はそんな王子様のような存  
在に救われる、『お姫様』になりたかったのじゃよ

「ちょっと待った、なんでそれで俺が王子様……むごヒーローにならなくちゃいけないんだ?」

「君が樋裏にとつての、初めての『男』だったからじゃな。自分にとつての『王子様』がするようなことを、それまでに必要な過程をすつ飛ばして実行してしまつた君に、相応の責任を取つてほしかつたのじゃり?」

「それで自分を守れるくらいには強くなれ つていつ理屈に発展したのか? 無茶苦茶だな……」

「夢見る女の子とこいつのは、やつこいつものらしさからの」

とこいつわけで、俺はメルヘンチックな夢の道を絶賛爆進中の救芽井さんにお応えして、彼女を守るヒーローを手指すことを余儀なくされてしまつたわけだ。

朝の九時に待ち合わせていた俺は、十分前には既に救芽井家の前まで向かおうとしていた……のだが、彼女はそれよりも早く家を出て俺を待つていた。

「来たわね。いい!? 自分の身も守れない一般人のあなたを、みすみす『技術の解放を望む者達』の脅威に晒さないための護衛任務なんだからね!? 勝手に私から離れちゃダメよ!」

「……!」

そこで俺は不覚にも、赤いトレンチコートにミニスカートとこいつ、救芽井の女の子らしい格好に思わず目を奪われてしまう。

茶髪のショートと凛々しい目鼻立ちが合わさつて、大人っぽさと愛らしさが共存しているかのよつた、そんなアンバランスな魅力が保持されていた。

それが意識的なものなのかはわからないが、少なくとも俺と同じ年のようには、到底思えない風格がある。

「へいへい」

そんな心の(やましい)動揺を氣づかれまいと、俺は目を背けてわざとめんどくさうに返事する。すると、向こいつはムツとなつて

眉を吊り上げる。

「あと念を押して言つたが、『われは「トード」じゃないんだからね！』？」

「わかつてゐよ……」

ものすこく顔を真つ赤にして、救芽井は俺を威嚇するかのようこそ、思い切り指差して来る。ここまで警戒されてるのかと思つと、心がえぐられるようだ……。

やつぱり、俺つて嫌われてるんだなあ。彼女と対話する度に、いちいち思い知らされる。

初対面がマズ過ぎたつてのもあるんだらうけど、彼女が男をくぐり知らなかつたつていうのが何より痛かつたんだと思つ。そりやあ、初めて見た同年代の男にいきなり裸を見られちゃあ、ビクビクもしちゃうだらう……。

だけど、このままじゃいけないつてのは確かだ。この娘の王子様になつてあげる なんてのは、俺みたいなジャガイモ男には似つかわしくなさ過ぎるけど……それでも、出来うる限りの責任は取らなくてはなるまい。

そのためにも、そして俺自身の名誉のためにも、「変態」呼ばわりからは必ず脱却しなくてはー！

「な、なあ救芽井？ まずは仲直りから始めよつぜ。とつあえず俺のことは、ちゃんと一煉寺つて」

「さあ！ まずは昨日火事が起きた商店街のパトロールね。行くわよ変態君！」

俺の名誉挽回への第一歩をアツサツと踏みにじり、彼女は茫然としている俺の手を引きながら、ずんずんと進んでいく。

あうう、前途多難つてレベルじやねーぞ……。



## 「こんなアートは絶対おかしくよ

タベ、火災が起きていたという商店街。その現場には、警察やら野次馬やらがあちこちうろついていた。

俺は若干黒焦げになってしまった建物を見上げつつ、真剣な眼差しでそれを眺める救芽井の様子を、チラチラと横目で伺う。ブスッとした表情で腕を組む彼女の手首には、一晩で修理を終えていた「腕輪型着鎧装置」がある。ホツ、どうやら簡単に直つたみたいで一安心だ。俺のせいで使い物にならなくなつたりしたら、口トだもんな。

「くつ……『技術の解放を望む者達』……！」

苦虫を噛み潰したような顔で、彼女は建物から田を離さない。自分が解決させた後のことだが気になつて、ここに来たんだろうなあ。

昨日の夜中に起きた火災で、噂のスーパーヒロイン つまり彼女が着鎧する「救済の先駆者」が活躍していたことは、今朝の朝刊にしつかり取り上げられていた。

「巷で噂のスーパーヒロイン、またまた大活躍！」……という見出しあはもう見慣れたつもりでいたのだが、今になつて読んでみると、友達が新聞に載つたかのような感慨深さを感じてしまう。いや、別に彼女とは仲良くないんだけどね。それどころか

「ちよ、なにジロジロ見てるのよー。こんなとこひど、いやひじいわよ変態君！」

「」覧の有様だし。

道行く人々の雑談に耳を傾けてみれば、皆口々に救芽井のことを

噂してるのがわかる。まさか巷で噂のスーパー・ヒロインが、俺の隣でイラついてるアブない美少女だとは夢にも思うまい。……。

頭脳明晰、容姿端麗、身体能力抜群……なのは確かなんだし、その辺が完璧なのはわかるんだけど ただ性格が、ちょっとね。

救芽井は胸を両腕で隠しながら、キツい視線を送つて来る。俺が胸をガン見してると思つてるらしい。 おいおい、確かにけしからんおっぱいなのは認めるが、そこまでしなくたつて見えるわけないだろうが……。

しかし、「一トの上からでもわかる程の大きさとは 思わず腕を上げ下げして「おっぱい！ おっぱい！」と歓喜したくなりそうだ。

「全く……。もう、行くわよ！ 迷子になつても知らないからっ！」  
俺に見られてることが堪えられないのか、彼女はいきなり速いペースで歩き出してしまつた。ちょっと待て、自分から離れるなどか言つといで、それはないんじやないの？

救芽井は置いてけぼりな俺を放置して、ツカツカと先へ進んでいく。クリスマス前で賑わつてゐる今の商店街は、人通りが多い。このままじやあ彼女の言う通り、はぐれて迷子になつちまう！

「ちょ、待つてくれよお！」

俺は火事の跡を一瞬見遣つてから、すぐさま彼女を追い掛けた。

追い掛けたのだが。

「見失つちゃいました……」

はい、終了。

……つて、人通りの多い時期に一人で飛び出すとか無情過ぎるだ

「うう… どうやつて探すんだ？ この状況……。

「小さい町だから、いつもなら人通りなんてあつてないようなものなのに。よりによつてこの時期にとは……恐ろしい間の悪さだな」この場に彼女がいないのをいいことに、俺は思いつ切りため息をつく。商店街に来る途中、昨日の散々な扱いに辟易していて「朝から辛氣臭い顔しないッ！」と平手打ちを貰つたことがあるからな。今ぐら（精神的に）一息ついてもバチは当たるまい。

…… そういえば、救芽井はどこに行こうとしてたんだ？

ふと、それが気になつて、彼女が向かつていた方向を見つめていると

ぬいぐるみ屋が目に入った。

まさか、あそこに行きたかったとか？ 町の平和を守る、正義の味方が？

いやいや、ないない！ だつて、あの生真面目スバルタおっぱい星人だぞ！？ それに、今日は商店街の「パトロール」だつて本人も言つてたし！

…… でも、もしかしたら、ついでに見て行きたかったのかも知れないな。それに、二学期の終わりにこっちに引っ越してきただから、この町をよく知らないはず。ひょっとしたら、パトロールを兼ねて、この辺りを散歩してみたかっただじゃあ……？

正義の味方だらうとボインちゃんだらうと、俺と同じ年頃の女子には違ひないんだろうし。うーん、わからなくなってきたぞ。

あれ？ ちょっと待てよ……。

あの娘つて、この町に来て日が浅いはず。

最近来たんだから、この時期は人通りがやたら多いつてことも、多分知らない。

地元の人間（ここ）では俺（）と離れて、単独行動。

そして、なかなか帰つてこない。

……。

もしかしたら……いや、多分そうだ。  
俺は迷わず、商店街の近くのとある場所へ向かつた。救芽井がそこ  
にいる、と確信して。

その確信は、やはり的中していた。

商店街の傍にある、小さな交番。そこには、真っ赤な顔で俯くス  
ーパーヒロインの姿があつたのだ。

「お、おそ、遅いわよ変態君！　迷子になつてたらどうしようつて  
心配してたのよッ！？」

「あー……いや、どの口が言つんだ？」

ろくにこの町を知らない奴が、知つてる奴のもとを離れて、人通  
りの多い時期にうろついてたら、そりや迷うわッ！

当の迷子の子猫ちゃんは、さも自分は迷つてなんかいないと言わ  
んばかりに、ふくよかな胸を張つてるし……おお、揺れてる揺れて  
る。

「ゴ、ゴホン。とりあえず、目の保養になつたし、今回のところ  
は大目に見てやるか。知らない町での暮らしで、不自由が多いのは  
仕方ないんだし。

「お、迎えの人かい？　……つて、龍太君じゃないか！　お兄さん  
は元気にしてるかい？」

「あ、どうも。ええ、今頃は就活でバタバタしてるでしょうね」

「ハツハツハ！　出来れば龍亮君りゆううすけにも警察になつてもらいたいなあ

！ なにしる、交番勤務は大変でねえ。とにかく人手が欲しいんだよ

「兄ですか？ あいつはわりかしフリーダムですから、多分向いてないですよ」

迷子になつっていた救芽井を預かつてくれていたのは、顔見知りの若いお巡りさんだつた。松霧町 자체が小さな町だから、俺はここでの知り合いが結構多い。「ローマルさんと知り合つたのも、彼ら一家がこの町に引っ越ししてきたことだつた。救芽井と会つたのは昨日が初めてだが。

「そりかあ……にしても、君も隅に置けなくなつたねえ！ こんな超プリティな彼女捕まえるなんて！」

「ちょ、声が大きいですって！ それに彼女じや」

「断ッツッジて違いますッ！ 誰がこんなドッ変態君ッ！」

軽く冷やかすお巡りさんを止めようとした時。これ以上は生物学的に不可能というくらいに、顔を真つ赤にした救芽井の怒号が、俺達二人の鼓膜に突き刺さる！ キーンと来る聴覚の痛みに、俺もお巡りさんも思わず尻餅をついた。

ひぎい、ついに「ド変態」にランクアップかよう……。

「か、彼女じゃない？ それじゃあ誰だい？ こんな綺麗な娘、な  
かなかいないし……」

「ただの『ご近所さんですよお……！』

耳を抑えながら、俺は消え入りそうな声で必死に弁明する。

敢えて、「最近引っ越ししてきたお隣りさん」とは言わない。口にすれば、例の迷惑発光の元凶と知られ、彼女がクレームを受けてしまつからだ。夕べ、俺がそうしたように。

そうなれば、「変態」からの脱却が不可能になつてしまつだらう。

彼女達の都合上、光を止めることは出来ないし、それならクレームの末に、町を追い出されことになりかねない。

発光に悩まされることはなくなるが、嫌われたままで別れるのは後味が悪すぎる。そんなの、俺は絶対に嫌だ。

だからこそ、俺は彼女に応えなきやいけない。どうせ近所付き合いするんなら、仲良しな方がいいに決まってるんだから。

「そ、そりがちよつと残念だよ……」

「なにがですか、もう少しちゃ！」

聴覚をやられ、悶絶必至な俺達。その様子を、救芽井は拗ねた顔で見下ろしていた。

「し、信じられない！ 何が彼女よ……もう少しちゃ！ とにかく、さつさと行くわよ変態君ッ！」

彼女は俺の腕を引っつかみ、ズルズルと引きずつっていく。俺は強制連行されつつ、既にグロッキーだったお巡りさんに別れを告げた。

それから商店街に戻ってきた救芽井は、またも同じ方向へ向かおうとしていた。彼女の目線を追つていると、やはりぬごぐるみ屋に注目しているのがわかる。

やつぱり女の子だなあ……。

「な、なによ？」

いつの間にか、彼女の顔をまじまじと見ていたらしい。俺はそそくさと視線を正面に戻し、話題を出すことにした。

「何でも。それより、さつきの焼け跡以外にどこを『パトロール』するんだ？」

「う……！」

俺が振った質問に、彼女は言葉を詰まらせた。ははーん、さては真面目な「パトロール」は、火事現場のことくらいだつたんだな。

「ついで」どころか、散歩の方もかなり重要だつたらしい。

「……あ。 そういうえば、あんたつてあんまりこの辺には来たことないのか？」

「しょ、しょうがないでしょ！？ 出動時以外は、専ら地下室で訓練してるだけだつたんだし……」

ちょっとかわいそうな気がしたので、別の質問にしてみる。すると、今度は割とまともな答えが返ってきた。

なるほど、あの薄暗い部屋にねえ。道理で、お隣りさんなのに昨日まで一度も顔を会わさなかつたわけだ。

にしても、この反応……よっぽど、迷子になつたことを気にしてるんだな。同じ失敗をしたくないのか、微妙に俺の袖を掴んでるのがわかる。

でも、プライドに障るのかしつかりとは掴んでない。指先で、ちよいと摘んでる感じだ。

表情も、「仕方なくよ、仕方なく！」といいたげ。見ていて、正直めちゃくちゃじれつたい。

「だーもー、まどろっこしいなあ

俺は間の抜けた声で、一瞬彼女の摘んでいる手を払い その手をしつかりと掴んだ。

「き、きやあつ！？ なにするのよ変態君ツー！」

「ぬいぐるみ屋ー！」

「……え？」

「行きたいんだろ？ 一緒に見てやるから……離すな」

怒られるのは覚悟してたけど、やつぱりハッキリと言つてしまつた方が気分がいい。救芽井はボッと顔を赤くして抵抗してしたもの、やがてシユルシユルと大人しくなり、俺の言葉に小さく頷くようになつた。

よ、よかつたあ～……。これで「はあ？ なに勘違いしてんの？」とか言われたらいタリウマもんだったわ。まあ、それなりに確信はあつたんだけどね。

その後、ガラス張りの奥に陳列された、可愛らしいウサギやクマのぬいぐるみに夢中になる彼女の姿は、かなり意外だつた。

その様子は、無邪気にぬいぐるみと戯れたがる、小学生の女の子と大差ない。いつもの強張つた顔とは全く違う、なんだか「自然」な感じの笑顔を見ることが出来た。

そういうえば、救芽井の笑顔なんて初めて見たな……。スッゴく可愛いし、綺麗だ。改めて、彼女がアイドル顔負けの美少女なんだつて事実を思い知らされる。

「ねえ、変態君」

嬉々とした面持ちで、救芽井が話し掛けて来る。笑顔で変態呼ばわりは、なんか今まで以上に突き刺さる……。

「な、なんだよ？」

「ぬいぐるみ、どれがいいつて思う？」

「はつ？」

妙な質問に目を丸くする俺に対し、救芽井はフツと微笑んだ。なんだこの笑顔。天使か？

「今日買うぬいぐるみ。」こ褒美に選ばせてあげるわ

「なん……だと」

「マズい！ 僕はぬいぐるみを選別するスキルなんてカケラも持ち合わせていないというのに！」

し、しかしここで失敗したら、「変態」呼ばわりの汚名返上が遠退いてしまう……！

「うーん、参ったな……俺、人形なんてちんぷんかんぷんだし」

「別に何でもいいわよ。あなたが可愛いって思うものを選んで」

「そ、そうか？ だつたら」

直感で、行くしかない。

俺は腹を括り、一番それっぽいのを指差した。

「　この、緑のリボンのウサギ、かな」

俺が選んだぬいぐるみ。

それは、耳の辺りに大きな緑色のリボンを付けた、デカいウサギだつた。

「あ、ホントだ！ これ可愛いっ！」

救芽井は昨日までは想像もつかないテンションで喜び、ガラスをバンバンと叩く。おい、可愛いのはわかつたから落ち着きなさい！

「でも、どうしてこれがいいの？」

彼女はようやく叩くのをやめたかと思つと、今度は真ん丸な瞳で俺を見上げて尋ねてきた。あの鋭い眼光はどうへ！？

「ん……」のウサギの白がせ、なんかあんたの肌みたいで綺麗に映つたんだ。それに、リボンが緑なのも『救済の先駆者』っぽくていだろ？

と、俺はつい思つたままの理由を述べてしまつた。

あああ、マズい！ マズいぞ！ リボンはともかく、「肌」はマズい！ イケメンならまだしも、ブサメン予備軍の俺がそんなこと口走つたら犯罪にしかならない！ 「ド変態」からのからなるランクアップがきちゃうつづつー

「へへっー！」

救芽井は目をさらに丸くして、赤い顔のまま俯いてしまつた。声にならない叫び声を上げて。

「あ……」

そして、なにかを言おうと口を開いた！

いやあああ！ やめてえええ！ 変態以上なのはわかつたから、  
もう何も言わないでええええッ！

そして、俺が耳を塞<sup>ふ</sup>ごうとした時

「……ありがと」

信じがたい台詞を、彼女は言い放つていた。

その後、俺達は買つたぬいぐるみを抱えて昼間には帰路についていたのだが、その間一言も言葉を交わさなかつた。

行きの時は、昨日のボロ負けのことでガミガミ怒られながらも、いろいろなことを教えてくれていたのだが。

彼女によれば、商店街の火災も「技術の解放を望む者達」の仕業らしい。俺は拝見する前に気絶してしまつたのだが、「解放の先導者」には火炎放射器まで組み込まれているのだとか。恐ろし過ぎる……。

救芽井は顔を赤くして目を合わせてくれないので、俺はこうして会話が出来ない代わりに、今朝の話題を思い起こして帰るまでの時間潰すしかなかつた。

にしても、あの火事が「技術の解放を望む者達」の仕組んだことだつたとはね……。死人も怪我人も出なかつたから良かつたものの、こりやあ大変なことになつてきたもんだ。

救芽井が言うには、人殺しを目的としない「技術の解放を望む者達」が火事を起こしたのは、「救済の先駆者」をおびき寄せて、運動能力のデータを調べるのが目的だつた……という可能性が高いら

しい。向こうは、救芽井が死人を出さないようにする」とも計算済みだつたつてことか。

それに「偶然、火が油に引火した」と思わせるように火炎放射器を使えば、「解放の先導者」の存在を知らない人々は「放火」だとは思わない。だから、仮に死人が出たとしても「技術の解放を望む者達」が世間に取り沙汰されることもない。

なんとも、セヨいことをするもんだなあ。さすが悪の秘密結社（ただし人間は一人だけ）。

ところで、そういうハードな話を朝っぱらからする救芽井だつたけど、蓋を開けてみれば結構女の子らしいところもあるじゃないか。ちゃんと彼女の事情に付き合つてあげれば、なんとかなるかも知れないな。

そんな淡い期待を抱いていると、救芽井家が見えてきた。さあて！ぬいぐるみを家に運んだら、俺はいい加減勉強しないと！「救済の先駆者」の訓練も大事だが、それにつつを抜かして入試に落ちたくもないからな。

つて、あれ？俺ん家の前に、誰かいる……。

よく見てみると、救芽井家の隣にある俺の家に、人影が見えていた。兄貴か？でも、今は就職の説明会に行つてゐる頃だし……郵便にも見えないな。あのシルエット 女の子？

あ、なんか見つかつた。つーか、こっちに走つてきた。

「一煉寺！？ あんた何しとん？」

俺の姿を見つけるなり、息せき切らして走つてきた彼女は……俺

の顔見知りだつた。

「へ、変態君？」この娘 誰？」

いきなり登場してきた第三者に、救芽井はかなりテンパつている。彼女の口から飛び出してきた「変態」というワードに眉を潜めつつ、例の女の子は俺に詰め寄つてきた。

「い、一煉寺！ あんた受験やのに、何をほつつき歩ことんや！ あと、『変態』つて何や！？ この娘、誰やつ！？」

あー……まあか、この期に及んで、この娘に見られるとはあ。めんどくわこじになつてきやがつたなあ……トホホ。

この女の子の名前は、矢村賀織。

俺のクラスメートにして、唯一の「女友達」だ。

## 受験と訓練を秤にかけて

桜色の薄い唇。口から覗いている八重歯。

黒髪のセミロングに、やや幼い顔立ち。

フォローのしようがないペッたんこである一方、脚線美には定評がある。

そして小柄であり、俺から見れば頭を撫でるのに丁度いい身長差。

俺達一人のまえに現れたクラスメートの容貌を簡単に説明するなら、まあこんな感じだろう。ちなみに、彼女は四国出身だからか地元の方言が特徴的だ。

矢村は俺と救芽井を交互に見遣ると、キッと俺を睨みつけてきた。

ひい、こええ！

「今が大事な時やのに、よしこんなとこりで女と油売つとるのぉー。これで落ちとつたら承知せんでー！」

「いや、ちょっと待ってくれ矢村ー。これにはいろいろと事情が…」

…！」

「なに？ 变態君の知り合い？ 用事なら早く済ませてね。この後すぐに特訓だから！」

「…あのね、救芽井さん。俺つて一応、受験生なんんですけど」

俺達の行動をデータと誤解している矢村が、なにやらブンスカしている。その一方で、救芽井は人の都合を華麗にスルーして、勝手に俺のスケジュールを侵略しようとしていた。

二人揃って、俺を何だと思つてやがるー！

「…さつきから気になつとつたんやけど、『変態君』つてどうこ

う」とや？

「う…！」

矢村は田を細めて、ジャージと俺を睨みつづけている。しかし、

難しい質問をしてきたもんだ。

詳しく述べを話そつものなり、どうしても救芽井の素性に発展してしまった。俺一人ぐらくならまだしも、矢村をこのゴタゴタに引きずり込むのは忍びない。

上手くはぐらかすには、俺の弁明ぐらいじゃ足りないだろう。これは救芽井にも協力してもらおうと視線を送

「この人が私の着替えを覗いてたのよ。だから変態君

「前に、しつと何をぬかしとんじゃ あああああッ！」

「な、なんやつて！？」一煉寺、あんたいつの間にそんなツ……！誤解を解こうと口を開く間もなく、矢村は信じられないものを見るような目を向けて来る。お前もあつたりと信じるなああああッ！

遺憾だ！ 誠に遺憾でござるー。俺は抗議しようと大口を開くが

……。

「仕方ないでしょ、事実なんだからー。それに、この娘まで巻き込む気！？」

と、そつと耳打ちされてしまい、しゅんと引っ込んでしまう。くう、そんな言い方されたら俺が悪者になってしまってはいか！

「とにかく、私達は忙しいの。これで失礼するわね」

「だから、矢村が言うように俺だって受験勉強が……！」

「あなたの頭脳じゃ、どの道無理よ。それよりあなたには、身体で覚えなくちゃいけないことがたくさんあるのよ

「ム、ムキー！ そんな言い草ないだろー！」

商店街で迷子になつた時のように、救芽井は足速に歩き出していく。俺は自分が選んだぬいぐるみを抱いたまま、なんとか追いつこうと必死に歩いていった。

そんな俺達にほつたらかしにされた矢村は……。

「ちゅ、ちゅっと待ちこやああ！」

やや涙目になりながら追い掛けてきた。餌を取り上げられたペッ

トみたいだぞ、お前。

「あー……いや、あのな矢村？ 僕は今ちゅと、重大なトラブルに遭遇しててな」

「トラブルってなんよ！？ 一煉寺つて、今まで恋愛とか全然やつたやん！ 何で今頃、こんな、こんな可愛い娘とおるん！？」

「違う違う、この娘とは別にそういうわけじやなくてだな……な、なあ救芽井？」

助けを請つように、もう一度救芽井に目を移す。また余計なこと言わないか、ちゅっと心配……。

「……ふん！ 決まつてるでしょ。あなたみたいな変態君とお付き合にするわけないじやない」

ぐふう、これはこれでキツイ……！

で、でも、これでなんとか容疑は晴れた、かな？ 僕はチラリと矢村の様子を伺う。

「うーん。やけど、やつぱりなんかおかしい……。一煉寺つて、アタシ以外の娘とあんま喋らんし、女子から話しつけられたらテンパるくらいやのに。それなのに、いきなり『覗き』やなんて……。」

あああ！ ちくしょおおお！ 誤解を解きたい！ 解きたいけど溶けないいい！

「そ、そんなにあの救芽井つて娘が良かつたんやろか？ いかん、いかん！ そやからつて、一煉寺は渡せん！ よ、よつじ、せやつたらアタシやつてもっと積極にならないかんやうな、そやうな！」

おや、何かブツブツ独り言を呴いていらっしゃる。つーか、なんかほつぺが桃色になつてない？ 顔も微妙にニヤけてるよつな……。

「い、いぢれ りゅ、龍太ツ！」

心配になつて顔を覗き込むうとしたら、今度はいきなり……名前で呼ばれた？ はて、今まではずつと苗字で呼ばれてたはずだけど。

「お、おう。どうしたんだ？」

「つつ、付き合つとるわけやないんやつたら、一緒に勉強せんか？ わからんとこ多いやろ？」

「んー、それは助かるんだけど、今の状況だとちょっとなあ……」

急に名前で呼び始めた矢村の、突然の提案。それは、成績が常に地獄の底へ激突寸前な俺にとつては、願つてもないことだった。

一見子供っぽいところがある矢村だが、彼女はこう見えても学年上位の成績保持者なのだ。うむ、友人として鼻がデカい。いや、高い。

……だが、今の状況はなかなか辛いものがある。受験勉強が大事なのは事実だが、下手をしたら「勉強した記憶を引っこ抜かれてしまいかねー」事件に巻き込まれてるのも、無視しがたいんだよなあ……これが。

というわけで、俺は恐る恐る救芽井の顔色を伺うことにする。ああ、俺つて情けないなあ……。

すると、彼女は何かに気づいている様子で、まじまじと矢村を見つめていた。なになに？ 矢村の顔に何かついてんの？

しかし俺がその意味を考えようとする前に、彼女は俺の視線に気づいてフイツと顔を背けてしまった。くづく、やっぱりこの鬼軍曹から、許可なんて取れるわけ

「ふん！ そんなに勉強が大事なら、今日一日くらご許してあげる。彼女と好きなだけいればいいじゃない！」

「おおー？ あんなに格闘術の特訓を優先させよつとしてたのに、どうこう風の吹き回しだ？ とにかくワッキー！」

「あ、ありがと」

「勘違いしないでよねー！ その娘の気持ちを汲んであげての」となんだからねー！」

「わ、わかってるわかってる。ホント助かるよ」

眉を吊り上げ、決して「俺の都合を気にかけてのことではない」と強調する救芽井。そんなこと言わなくとも、俺のわがままなんて聞く余裕がないのはわかってますから……。

ところが、俺がその眉を態度で表すと、彼女はさらに不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。あれま、なにがいけなかつたんだ？

まあ、今はそんなこと考えたつて仕方がない。救芽井家の事情を思えば、俺が自分の都合に時間を使えるチャンスは限られてるんだわい。

今はせっかくの受験勉強の機会を、大切にさせてもらいますか！

「よし。んじゃあ、ぬいぐるみを運んだら、勉強見ててくれよな」

「うん、任せときー！」

俺から一解の返事を貰つた途端、矢村はパアツと明るい顔になつた。おお、そんなに喜ばしいことなのか？

俺の「こと」を名前で呼ぶよつになつた「こと」、なんかいつもと様子が違う。どういうわけか、俺に優しい……ような感じがするな。一学期が終わる前まで いや、ここで救芽井と会つた時までは、彼女ほどじゃないにしろ、かなりシンシンしてる娘だつたのに。急にどうして

ハツ！ まさか……俺が「変態」呼ばわりされてるのを哀れ  
んで……！？

くうううツ！ なんていい娘なんだ矢村アアアツ！ 俺がもしイ  
ケメンだつたなら、ここで交際を申し込んでもいいくらいだ！  
だけど、変態呼ばわりの誤解が解けないのは辛い……いや、それ  
でも彼女は味方になつてくれているんだ！

そうだ、俺にはまだ……帰れる場所があるんだ！ こんなに嬉し  
いことはない……！

「ど、どしたん龍太？ なに泣いとん？」

「うぐ、ひつぐ……ありがとう、ありがとう、矢村あ……！」

心配そうに俺の泣き顔を覗き込む彼女。おおお……いつもならお  
つかない女友達でしかなかつた彼女が、今は美と慈愛の女神に見え  
るツ……！

「 バカツ」

それだけに、隣で救芽井がそつと口にした言葉は、興奮の余り聞  
き取ることができなかつた。ま、いいよね？

## 勉強会が不毛に終わった件について

俺んとこの家は、兄貴と二人暮らし。親父とお袋は県外に転勤している。

月一で仕送りが来るんだけど、お金のやりくりは基本的に兄貴がやつてるんだ。数学の最高点数十一点の俺が、お金の管理なんてやろうとしたら恐ろしいことになるだろうからな。

「ふあ～、ただいま……つっても、誰もいないかー」

「お、おじや、お邪魔します！」

昨日のドタバタのせいか若干眠気が残っているらしく、俺はあくびをしながらのんびりと帰宅。その後を、矢村がやけに緊張した様子でついてきた。

あ、そういうえば矢村を家に入れるのって初めてなんだっけ。

「いいよ、固くなんなくて。今は兄貴、いないみたいだし」

「う、ううん！ 人様の家なんやし、粗相のないようになんかんけん！」

いや、だから俺しかいないんだって。この妙に頑固なところが、彼女の唯一の欠点 かな？

「……って、え？ ジャあ今、家にあるんなは アタシと龍太だけ？」

「そだな。まあ、この方が静かで勉強する分にはいいだろ？」

もしかしたら、賑やかな方が良かつたんだろうか？ ふと気になつたんで、ちょっと顔色を伺つて

「せやな！ そらそりやわ！ 一人つきり！ の方が、集中できるやうしちつ！」

おうつ！？ やけに上機嫌じやないか。なんか「一人つきり」つてのをやけに強調してるけど……ま、本人がいいつて言うんだから、

いいかな。

「！」ここが龍太の、部屋なんかあー！」

矢村は俺の部屋に入ると、まるで遊園地に来た子供のようにウキウキとしていた。そりやまあ、初めて来る場所だらうけど……そんなに嬉しいのか？

「別に大したものじやないだろ？ 殺風景だし」

「ううん、そんなことないつて！」

特に何かのファンというわけでもないから、ポスターみたいな飾り物もない。漫画やラノベ、ゲームがちらほらあるくらいの狭つ苦しい部屋だ。女の子が喜びそうなものなんてないはずだけど……。

「……って、なにしてんの？」

しばらく田を離していると、今度はなにやらベッドの下に潜り込み始めていた。そんなところには何もないぞ？

「えっ？ あっ、いや！ 龍太はどんなが好きなんかなあーってな！」

「は？」

「な、なんでもないつ！」

訝しげに見る俺の視線に耐え兼ねたのか、彼女は顔を赤くしてピッとはつぽを向いてしまった。まさか、エロ本でも探してたつてのか？ おいおい、俺はパソコンで画像落として済ます派だぜ？

「とにかく、さつたと始めようぜ。まずは現国から頼むわ」

これ以上詮索されでは、俺の性的嗜好が暴露されかねん……といふわけで、俺は早急に勉強会の開始を進言する。おお、自分から「勉強したい」とか言い出すなんて、俺も成長したなあ……。去年まで、テスト期間中でも何食わぬ顔でゲーセンに繰り出してた頃が懐かしいわい。

「そ、そやな。始めよか……」

矢村はやや名残惜しげに辺りを見渡すと、そもそもと可愛らしさ  
バッグから教科書やらノートやらを出して来る。方言や八重歯、そ  
して快活な性格からか「男っぽい」<sup>ボーラッシュ</sup>と言わがちな彼女だが、持  
物は結構ファンシーなものが多い。

最初の頃はそういうものまで、男物のような無骨なものを持ち  
歩いていたらしいのだが……どういうわけか、今はピンク色が眩し  
い「少女趣味全・開！」なグッズを多数所持している。どうしてこ  
うなった。

さて、そんな彼女に勉強を見てもうようになつて小一時間。  
「漢字問題ぐらいい解けなあかんやるー！ 文章題は難しいの多いん  
やけん、ここで点数取つとかな！」  
「いや、なんか『これぐらいい楽勝ー』つて思つて書いてたら『間違  
いでした』つていうのがほとんどなんだよな」  
「そーゆーのを、油断大敵つて言つんやで！ ほら、これはなんて  
読むん？」

「えーと、『あらぶわ』ー。」

「ち・ち・ぶ！ やらしげに覚え方しよいつとおりからやー。」

……絶賛大苦戦中でござります。

「ああんもう、次！ 熟語の問題やー！ 強いものが弱いものを喰  
らひつ」つていう意味の短文やでー。」

「よーし、かかつてこーーー！」

「問題文は、『所詮この世は（ ）』ーわあ、これはなんや  
？」

「『所詮今夜も焼肉定食』ー。」

「『所詮この世は弱肉強食』やうー！ どんだけ腹減つとんねんッ  
！？」

「いや、よく考えたら毎飯まだだつたなーつてや」

「しかも空欄以外のところも違つとるしつー！ 腹減りすぎて頭回つ  
てないんやないん！？」

つい一む、思つた以上に手厳しい。俺がバカなだけなんだろつか?  
向こうは俺以上に頭抱えてるし……。

その後は小説の文章問題にも挑んだが、やはり難航した。

「さあ、この後太郎はどう考えたん?」

「次郎をぶつ飛ばしてやろうと思つた」

「なんでやー? 捨て犬を雨の中から拾つてきた弟にある」とか…

?

「だつてこの兄弟、マンション暮らしなんだろう? 普通、集団住宅でペットは無理だつて。よつて飼つちゃダメ。元のところへ捨てるなさい!」

「この物語のオトンみたいなこと言つなあああツ!」

いや……だつてそうでしょ? 「捨て犬が可哀相」って人情だけでこの近所さんやお隣りさんは納得せられないだろう?

現に救芽井家がそうだしなあ……。あそこはむしろ、人を自分達の都合で振り回してゐる状態だし。どうせ俺だけだからいいけど。

この文章題では、太郎は次郎と一緒に反対派の父親を説得しようとしてゐるけど……俺にここまで気概はないなあ。途中で諦めて返しちゃいそうだ。

結局、昼間の時間を全部使つての「現国集中特訓」になつてしまつた。頭の中の予定じやあ、もつと数学とか英語とかにも時間を割きたかつたんだけど。

日が沈みだし、辺りが暗くなつたとしている時間になつてゐるとに気がついたのは、ついさっきのことだつた。

「もうこんな時間か……そろそろ切り上げるか?」

「そやな……まるで成長しとらんナビ、今日のところはこれまでやな」

ぐふつ、マジかよ。これでも長時間脳みそフル回転で頑張つたつもりだつたんだけどなあ。

「できれば、英語の勉強とかもしたかったんだけどなあ

「……龍太、月曜日は英語で何て言うん?」

「え? んーと、『モンダイ』」

「『マンデー』や。……ホント、『モンダイ』外やな、あんた『ムツ、そんなひどいこと言わなくなつていいいじゃないか! なんだよ、その冷ややかな日はつ!』

「なあ、龍太。もしよかつたらやけど……」

「ん?」

勉強道具を纏めて、帰る準備している矢村が不意に話し掛けってきた。心なしか、声が震えてるよつな……気がする。

「家まで、送つてもらつても、ええかな? 勉強頑張つてくれたし、息抜きに、ちょっと寄り道しながら……とか」

少しモジモジしつつ、今にも消え入りそうな声色で、そう提案してきた。まあ、今日一日付き合わせちまつたんだし、そのくらいお安い御用だよな。

「ああ、いいぜ。一緒に行こうぜ!」

「い、一緒に……!? う、うんつ! ありがとうつ!」

感極まつた顔で、彼女は深く頷いた。うーむ、そんなに喜ばしいことなのかな?

「どうか、そんなに俺が「変態」呼ばわりされることを哀れんで……!」

「グスン、いいつてことよ…… ああ、行こうぜ」

矢村の慈愛に、俺は再び涙した。暖かい、なんて暖かい娘なんだ!

「それに引き換え、俺の惨めさときたら……うつつ。」

「ど、どしたん? 大丈夫か?」

「ああ、大丈夫だ……心配してくれて、ありがとう……!」

せめてもの恩返しとして、自分が元気を貰っていることをアピ

ルしようと、俺は爽やかにスマイルを見せる。すると、彼女はボンツと顔を赤くして俯いてしまった。あれ、なんかマズかったかな？

何が恥ずかしいのか、赤面したまま喋らなくなってしまった彼女の手を引き、俺は玄関の前まで来た。さあ、彼女を送つたらまた勉強だな……。

いや、もしかしたら今日勉強に集中した分、救芽井にめちゃくちゃしじがれるかも……！？

そんな不安要素を抱えつつ、ドアを開けた俺の前に立っていたのは

「お？ なんだ龍太、彼女連れて夜のデートか？」  
「弟さんですか？ 初めまして、古我知剣一です」

就活帰りの兄と あの、古我知さんだった。

## 悪の親玉、イン・マイホーム

ちょっと、待て待て待て……！

え？ 何この状況？ 何で悪の親玉とこんなタイミングで鉢合わせしなきやなんないの！？

「ああ、こつちは就活説明会の時に、落とした財布を拾ってくれた人でさ。お礼にちょっと飯でもご馳走しようってここだつたんだ」  
古我知さんについての説明を入れて来るのは、俺の兄貴・一煉寺龍亮。もうじき就職活動にのびのび取り組もうとしてる、大学三年生だ。

こやつは俺の血縁者である癖に、頭も顔も運動神経もよく、道を歩けばいつの間にか女に囲まれてる。まあ、つまり「月の果てまで爆発するべきリア充野郎」というわけだ。

この憎たらしい兄貴のおかげで、俺がどれほど惨めな思いをしてきたのかを知るものはいまい……。一人で町を歩けば、兄は羨望の目で見られ、俺は哀れみの目で見られるッ！ 同じ兄弟だというのに、なぜここまで違うッ！？

俺は必ず兄貴を引き立てるためのピロ口にされ、「お兄さんを見習いなさい」と言われる毎日だ！ なぜだ！？ ……坊やだからか？

そんな俺だからか、いじめの対象にされることもあった。それを見兼ねて、兄貴は俺に護身術としての少林寺拳法を教えてくれた。  
まあ、そこは素直に感謝しどう、かな。

つて、今はそれどころじゃねーッ！

くせつ毛のある茶髪を搔きむしり、兄貴は少し困った様子で俺と古我知さんを交互に見てる。客人に妙に警戒してる弟を、どう紹

介すべきか考えあぐねている……という感じだ。

「……といえば、古我知さんはずいぶん優しげな笑みで俺を見るけど、何で何食わぬ顔で突っ立つてられるんだ？ 自分が狙う獲物なら、もつと睨んできても良さそうなもんだが……。」

「元気の良さそうな弟さんですね。なんといつか、昔を思い出します」

「ああ、まあちょっとバカなところはありますけど、根は悪い奴じやないんで。気にしないでくださいね」

この人の正体を知らないであろう兄貴は、人の気も知らないで呑気なことを言つてゐる。あのなあ、自分の肉親を狙つてる敵にわざわざ紹介すんなつつーの！ まあ、知らないんだからしようがないんだけどね……。

「古我知さんめ、余裕こいた顔しやがつて……」「お前なんかいつでも捕まえられる」つて言いたいのか、こるあー！

と、気づかぬ内に顔に出ていたらしい。その場で兄貴に「お客さん」にガンつけてんじゃねーよ」と、ゲンコツを貰つてしまつた。いてて……。

「……だけど、落ち着け。こんな時こそ、冷静になるんだ！」

「……ここで古我知さんの正体を訴えるのは簡単だけど……はぐらかされるかも知れないし、下手したらここで暴れられることも考えられるな。そんなことになつたら、兄貴も無事じゃ済まなくなる……。」

「……だが、ここで何事もなかつたかのように素通りしたら、兄貴と古我知さんは一人つきりになる。そうなつたら……アツー！」

「……じゃなくて、商店街の火事みたいに危険な目に合わされるかも！」

「……いや、ないな。それだつたら隣の救芽井家が黙つてないし、兄貴に危害が及んだら俺が警察に通報して終わりだ。」

「技術の解放を望む者達」だつて警察沙汰が嫌なんだつたら、余

計に暴れるのは避けたいはずなんだから。

つまり、彼が兄貴に手出しするメリットはナシってことか。

「……は何も知らない振りをして、出て行つた方が得策なんだな……。

「全く……いいから、お前はさつさと彼女とテートに行つてこよ」とすると、いきなり兄貴が変なことを言い出した。こんな時に

彼女？

「彼女つて、矢村が？」

「ん？ 違うのか？」

あっけらかんとした俺の対応に、兄貴は目を丸くして矢村の方を見遣る。彼女は俺の後ろで顔を赤くしながらペコペコしていた。

「どう見てもただの友達には見えないんだがなあ……」

「んー、そうかあ？」

「ももも、もーえー ゃん！ そんなことより、はよ行こよやつ！」

俺と兄貴が兄弟揃つて首を傾げていると、矢村はいたたまれなくなつたのか大声で叫び出した。

「ええ、それがいいですね。お一方、もうじきクリスマスですから……素敵な聖夜を楽しんで来ては？」

古我知さんも面白げに、彼女の背中を押すようなことを言つ。なにが楽しいんだよ、あんたは！

あーもー、調子狂うな全く！ とにかく古我知さん！ うちの兄貴にアツー！ ……じゃなくて、妙な真似したら即通報だからな！

「おまわりさんこいつです」つて訴えてやるからな！ 覚悟しつけよー！

迂闊にアクションを起こして暴れられたら敵わないしな……向こうも警察呼ばれると困るんなら、大人しくしてのしかないだろ？ じ。後ろ髪を引かれる気分ではあるけど、今はどつする」ともできない。

「しょうがねえ……行こうぜ、矢村」

「う、うん」

俺は何事もなく「古我知さん」という古の嵐が通り過ぎることを祈り、矢村を連れて家を出ることにした。

クリスマスが近いというだけあって、外はなかなかイルミネーションが盛んだ。住宅街だけでも、そこかしこにクリスマスツリーの飾り付けがあつたりする。

ちょっとリッチな家庭では、サンタやトナカイのオブジェまで飾られていて、なかなか見栄えがいい。いいなー、俺ん家なんか、家にちっちゃいツリー型ろうそくがあるくらいだぞ。

「商店街の方とかだつたら、もつと派手なのがあるかもな。朝行つた時も、結構人通りが凄かつたし」

何気なくそう言つてみた。……言つてみただけだったのだが、何かがいけなかつたらしい。

それまでホクホク顔だつた矢村が、急にムスッとした表情になってしまったのだ。解せぬ。

「……むう

「あれ？ なんか変なこと言つたか、俺？」

「それって、あの救芽井つて女の子と行つた時やろ……」

「そうですが、何か？」

「やつぱりや！ もおおッ！」

すると、矢村は何が不満なのか「ムキーッ！」と怒り出してしまつた。くう、救芽井の態度といい、どうやら俺は「無意識のうちに女の子の機嫌を損ねてしまう」スキルの持ち主らしい。

こないだ、兄貴がモテない俺のために「ときメモ」とか「ラブプラス」とか買っててくれたけど、正直まともにクリアできる自信がないぞコレは……。

「だいたい、救芽井って言つたら最近引つ越してきた迷惑行為常習犯やんツ！ 龍太やつて被害者やのに、なんでそんなとこの娘と一緒にあるんー？」

「あー……まずいぞ。またしても救芽井家の事情に関わりかねん質問が飛んで来やがつた。

「アタシの方が付き合いも長いのに……あんたの面倒も見れるのに……なんで『救芽井』なん？」

「おや？ 今度はなんだか急にトーンダウンしてしまつたみたいだ。なんだか縋るような上目遣いで、俺の顔をジッと見つめている。

「クリスマス」つていう「ムード補正」のおかげかも知れないが、めっちゃ可愛く見えてきた。大丈夫か？ 俺……。

桃色の唇に、雪みたに白い肌。普段あんまり意識してない分、矢村のそういうところが目につけやうと、なんかドギマギしちまつて氣まずいんだよなあ。

「……と、俺が一人で勝手に脳内暴走しているつむじ、いつしか俺達は昨夜の公園にたどり着いていた。

「あちゃー」

「もちろん、あれだけ大暴れした後の損害が元通りになつてゐるはずもなく、公園全体に警察が調査した跡があつた。そこら中にビニールシートやら立入禁止の注意書きやらがいっぱい……あーあー、警察の介入は困るつて話はどこに行つちまつたんだ？」

こんな調子じゃあ、遅かれ早かれ救芽井家か「技術の解放を望む者達」が嗅ぎ付けられちゃうだろうに。近所迷惑、ここに極まれり。

「なんやコレ！？ めちゃくちゃやん！」

「当然、何も知らない矢村はあわてふためくばかり。うわあ……別

に俺がやったわけじゃないんだけど、関わった者として凄く申し訳なくなつてくる……。

「と、とにかく、早く行こう。家はこっちであつてたかな？」

「これ以上ここにいたら、今度はこっちがいたたまれない！ 俺は矢村の手を引いて、その場を離れることにした。

それからしばらくなつて住宅街を歩いていたのだが……会話がない。まるで、商店街から帰る時の救芽井みたいだ。

手を繋いでるせいだろうか？ 俺は恐る恐る、手を放して彼女の表情を伺う。俺、最近人の顔色ばかり気にしてるなあ……。

「ねえ、龍太

「な、なんだ？」

俺が握っていた自分の手を見つめて、か弱い声で呟いている。あまさか手を握ったことを怒つてらつしやる？ いくら「変態」呼ばわりされることで心配してくれてるって言つても、これはちとやり過ぎだつたんだろうか……。ああ、なんてこつたい！ セッかくの慈悲を、俺はああツ！

「ひひして、手を繋いでくれた時のこと……覚えとる？」

と後悔していたら、彼女はそんなことを口元していた。顔を、トマトみたいに赤くして。手を繋いだ時……ねえ。それだったら、ずいぶん前になるなあ。

あれは そう、中学一年の夏。

俺と矢村が、初めて会つた頃だけ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4865z/>

---

着鎧甲冑ヒルフェマン

2011年12月29日23時50分発行